

2023年5月14日（日）「現代に生きるエレミヤのことば」

エレミヤ29:1-7

1 次に記すのは、ネブカドネツアルがエルサレムからバビロンへ捕囚として移した、生き残っている長老たち、祭司たち、預言者たち、およびすべての民に、預言者エレミヤがエルサレムから書き送った手紙の言葉である。2 それは、エコンヤ王、太后、宦官、ユダとエルサレムの高官、職人と鍛冶屋とがエルサレムを去った後に、3 ユダの王ゼデキヤがバビロンに、すなわちバビロンの王ネブカドネツアルのもとに派遣したシャファンの子エルアサとヒルキヤの子ゲマルヤの手に託したものである。4 「イスラエルの神、万軍の主は、私がエルサレムからバビロンへ捕囚として送ったすべての者に、こう言われる。5 家を建てて住み、果樹園を造って、その実を食べなさい。6 妻をめぐって息子、娘をもうけ、息子には妻を迎え、娘は嫁がせて、息子、娘を産ませるように。そこで増えよ。減ってはならない。7 私が、あなたがたを捕囚として送った町の平安を求め、その町のために主に祈りなさい。その町の平安があつてこそ、あなたがたにも平安があるのだから。

今日は唐突にエレミヤ書を取り上げた感がありますが、2008年5月11日に牧師に就任してから15年経った記念として、この箇所から語りたいと考えておりました。当教会の歴史としても、来年には30周年を迎えますので、一つの節目の時期と言えるのではないのでしょうか。また、世界的にも2023年は重要な変化のある年になると言われており、それは78年という周期的な意味で、1789年のフランス革命、1867年の大政奉還、1945年の終戦に続く、何らかの意味におけるパラダイムシフトになる年ではないかと巷では囁かれています。世界経済には「成長期」と「衰退期」があり、企業も教会もそれぞれの時期に同じように行動しては成り立たないという現実があります。ある一定の周期で成長期と衰退期は入れ替わりますが、現在の世界情勢を見るところ、ほぼ間違いなく今は衰退期に突入していると思われます。アメリカでは次々と大手銀行の破綻が起きてきており、これは必ず日本にも波及してくる問題です。日本は30年に及ぶデフレの期間を経て、今は「衰退期におけるインフレ」という、我々庶民にとっては大変な試練の時期に入っています。（一般的な意味で）収入は増えないけれど物価と税金と社会保険料が上がっていくという所謂「スタグフレーション」が始まりつつあります。サプライチェーンの崩壊による物価高が押し寄せてきており、食糧価格だけでなく、電気、ガス、水道料金の値上げが目前に迫ってきている状況です。このような時代にあつて、教会もまたあり方が問われていると思われるのです。戦後は、日本経済も底辺からの再スタートであったため「上昇」がキーワードありましたが、今はロシアーウクライナ戦争の只中にあるだけでなく、その影響下における物不足、エネルギー不足、次なる感染症の危機、世界大戦の足音といった諸々のことが庶民の生活を脅かしています。コロナが5類に引き下げられて社会に安堵感が出てきてはおりますが、これから次々とやってくるが見込まれる新たな試練を私は想定しています。そのような時代であることをよく認識し、どう歩むべきかを考える時なのではないでしょうか。

聖書を読むと、イスラエルの歴史の中にも成長期と衰退期が幾度も訪れていたことが分かります。戦争、飢饉、捕囚などの時代、民は無一文になったり餓死者が出たりしました。そのような「衰退期」を経て、再び国の復興を目指して行ったのです。聖書読者は、歴史的な大事件が起きたときに神の民がどのようにそれを乗り越えて行ったかを学ぶことが重要です。ノアの洪水、飢饉によるエジプトへの疎開、バビロン捕囚……。これらの事件が起きたとき、犠牲になる人々も多くいた中で、生き残って信仰を後世に残して行った人々もいました。こういう人々のことを「Remnant」（残りの者）と聖書は呼んでいます。歴史は繰り返します。私たちには、聖書からも、教会史からも、具体的な実例がたくさん提供されています。戦時中のごたごたを耐え忍んだ教会もありました。そういうところから、これからの時代に私たちがどう向き合っていくかを学ぶことができるように思うのです。

今日選びましたエレミヤ29:1-7は有名な箇所です。実は20年以上前、神学生時代に同じところから語らせていただいたことがあります。9.11が起きた2001年頃だったと記憶していますが、世界的大事件が起きたときにも信仰者は投げやりになるのではなく、与えられた務めを日々忠実に果たし続けていくべきではないかということ、未熟ながらもお話しさせていただきました。

ここで語られているエレミヤのメッセージは、バビロンの地に捕囚として連れて行かれたユダヤの民に向けられています。その内容は驚くべきものです。誇り高き神の民に向けて「その地の王に逆らうのではなく、そこに定住して繁栄せよ」と言っているのです。捕囚の目的というのは主に、反乱の防止、職人の確保、労働力の確保であったと言われ、古代オリエント社会においては、このような強制移住が頻繁に行なわれていました。2節で「**エコンヤ王、太后、宦官、ユダとエルサレムの高官、職人と鍛冶屋とがエルサレムを去った後に**」と言われているように、王もその妻も、彼らに仕えていた側近も、政治の担い手たちも、産業を支えていた人々も、根こそぎ連れ去られてしまったようです。宗教的な象徴であったエルサレム神殿も破壊され、国家としては事実上崩壊させられました。このように捕囚に遭ったのはユダヤ人ばかりではなく、周辺諸国からも多くの人々が労働力として集められたようです。ユダヤの地には僅かな貧民だけが残されましたが、彼らは「労働力」と見なされず、反乱を興す力もなかったからでしょう。現代においても形を変えて、ある強国が特定の民族を強制労働のために収容しているという問題が存在します（例えば、中国によるウイグル族の収監）。言語の強要、母国の歴史の否定、強制不妊処置などがもしあるとするなら、それは民族としての誇りを著しく奪い取る行為と言えるでしょう。

バビロニア帝国がユダヤ民族に対して、そこまでのことをしていたかどうかは疑問の残るところではありますが。古代バビロニア近郊から出土した粘土板の研究によると、捕囚とされたユダヤ人の多くがバビロニア帝国の支配に従いながら、自国の文化的・宗教的アイデンティティを守っていたことが分かっています。前572年から前477年の間のものと見られる粘土板には、賃貸借契約書、開業届、約束手形、その他の取引記録が含まれていて、当時田舎で暮らしていた人々の日常生活が垣間見られます。彼らは土地を耕し、家を建て、税金を支

払い、労役に服していたと書き記されているようです。「アル・ヤフドゥ」（「ユダヤの町」という意味の言葉）と呼ばれる場所にはユダヤ人の大きな共同体があったようで、4世代にわたるユダヤ人の名前が刻まれた粘土板や、古代ヘブライ文字が記された粘土板も見つかっています。この時代に「ユダヤ会堂」が作られ、そこで律法を学び礼拝をささげる自由が与えられていたようです。ユダヤ人は、アル・ヤフドゥだけでなく、それ以外のたくさんの町に散らばり、商取引によって技術を磨き、それが捕囚後のエルサレム再建の土台となっていたのです。

エレミヤは、バビロン捕囚の期間は70年だと伝えていましたが、これはやや象徴的な数字であり、史実では55年ほどであったことが分かっています。「70年」という時間の重要性は、いくつかの視点から説明することができるでしょう。まず、70年が経過するとほぼ一世代交代するということです。つまり、捕囚は次の代まで続くということが暗示されている。エレミヤは、この期間にユダヤ民族が減んでしまうことがないように、何としても異国の地で命をつなぐように訴えているのです。

**家を建てて住み、果樹園を造って、その実を食べなさい。妻をめとって息子、娘をもうけ、息子には妻を迎え、娘は嫁がせて、息子、娘を産ませるように。そこで増えよ。減ってはならない。**

(29:5-6)

エレミヤは、暴動や革命を決して勧めてはいません。むしろ、囚われの身にあって精一杯サバイブすることが教えられているのです。捕囚第一世代の一部の者が再び自国の地を踏むことがない可能性も示唆しています。「息子、娘をもうけ…云々」というのは、希望を次の世代に託せという意味でしょう。民族として生き残る確率を高くしていくことを考えているのです。そして、更に重要なことは、ユダヤ民族のアイデンティティそのものである主なる神様への信仰を守り、次の代にも確実に伝達することでした。

また、それと関わりがありますが、エレミヤは独裁体制というものが基本的に70年以上続かないという事実を知っていたのではないかと想像します。これは、現代においても言われることですが、70年というのはある体制にとって一つの節目となり易いのです。世代交代によってそうなることもあれば、この期間に社会的な価値観は大きく変わることが多いのも要因の一つとなりうるでしょう。私は、昭和、平成、令和と三つの年号を見てまいりましたが、平成時代の写真を見直しても、時代はずいぶん変わったと感じます。昭和となれば尚更のこと。70年の間にも、世界を揺るがす事件は数限りなく起こります。

バビロン捕囚時代の民にとって難しい問題であったらうと想像するのは、異教が強要されるときにどのようにして主なる神様だけを認め続けるかということです。同様のことは、イスラム圏の人々を無宗教化しようとする現代的な問題とも重なってまいります。私たち日本人も安穩としていられる状況ではなく、明日は我が身かもしれないのです。信教の自由を守るということ、信仰の上に法律があるのではないということ、私たちは常に認識し、精神武装している必要があります。

7節において「わたしがあなたがたを捕え移させたところの町の平安を求め、そのために主に祈るがよい」と言われていますが、これを読むときに思い起こす新約聖書の箇所が数カ

所あります。

- ・ 人は皆、上に立つ権力に従うべきです。神によらない権力はなく、今ある権力はすべて神によって立てられたものだからです。(ローマ13:1)
- ・ 人々に、次のことを思い起こさせなさい。支配者や権力者に服し、これに従い、あらゆる善い行いをするよう心がけなさい。また、誰をもそしらず、争わず、寛容で、すべての人にどこまでも優しく接しなければなりません。(テトス3:1-2)
- ・ すべて人間の立てた制度に、主のゆえに服従しなさい。それが、統治者としての王であろうと、あるいは、悪を行う者を罰し、善を行う者を褒めるために、王が派遣した総督であろうと、服従しなさい。(Iペテロ2:13-14)

パウロもペテロも異口同音に、世の支配者に従うべきことを教えています。無益な血が流されることを彼らは願ってはいない。実際、私たち庶民が100人集まったとしても、世の支配者には敵わないでしょう。しかし、その力も弱くなる時が来るのです。その時に備えて自分の賜物を磨き、動くべき時に動けるよう準備をしていることが重要であります。エレミヤが民に勧めていることは、勝ち目のない戦いを帝国に仕掛けることではなく、合法的に安定した生活を営むことであり、むしろその地の繁栄を主に祈ることでした。事実、時至って、ペルシャ帝国の勃興によって、バビロニア帝国は滅ぼされ、その時にユダヤ民族は解放されたのでした。

2020年より始まったコロナ危機から、世界は新しい体制に向けて進み始めました。この世界的な流れを止めることはできません。今年に入って、西村経済産業大臣がアメリカの戦略国際問題研究所(CSIS)で、「日本は独裁政権の台頭に対抗するための新しい世界秩序を呼びかける」と発言しました。更に、4月に発行されたアメリカの「タイム誌」の表紙には岸田首相の写真が載せられ、「日本を経済大国に見合う軍事力を持つ国際的な大国に戻そうとしている」と論評したことが大きく報じられました。これらは、世界レベルにおいて向かっている方向性に日本も乗っかっていくということの意志表明と言えます。私たちがまだ見たことのない新しい社会秩序(世界権力)の樹立に向けて、世界は動き始めているのです。新しい体制づくりのためには、古い体制は常に壊されていく。そういう時代に差し掛かっているということを認識しながらも、エレミヤが2500年前に語っていた変わることのない真理に私たちは立ち続けていくことができる。そのために、これからの時代を担っていく働き人や信徒の皆様と共に考え抜き、主の宣教の働きを何としても残していきたいと思っています。

最後に、これからの時代において特に重要だと考えていることをお話しさせていただきます。世界的な食糧問題が迫り来る時代、特に都心部に近い地域で生きている人々にとって、戦争や災害による物流の停滞は深刻な問題を引き起こす可能性があります。そのような事態になる日は「遠からず」かもしれません。各自で備えて生きている必要があると同時に、教会でも何らかの生産力を付けていくことが求められていると感じています。私自身も何かを始めていかななくてはならないと考え、今年は西東京市内で体験農園の契約を取り、野菜

作りを習い始めました。牧師館裏の小さな土地も、そのために用いていくことができるよう、砂利をどけて土を耕し、ジャガイモを育てているところです。あらゆることがデジタル化し、何でも買えば手に入った時代を生きてきた私たちですが、もう一度アナログで生き抜く力を身に付けていく必要があるのではないのでしょうか。このようにiPadを使って説教し、クラウドサービスであらゆるデータ管理をしている私ですが、もし電力不足によって停電が頻発するような状況になった場合にどうするかを考えさせられています。その時には、もう一度、紙媒体で本を読み、ペンで説教を書かなくてはならなくなるかもしれません。そういうことも含めて、たとえ戦時下にあったとしても福音を語り続けられるよう、備えていなくてはならないと考えています。信徒の皆様も、自分自身の目で聖書を読み、福音を聞き取る力を養い、いつでも仲間のために慰めのことばを語れるよう、備えて生きていていただきたいと願います。そして、この信仰を次世代に継承していけるよう、今教会に与えられている若い世代を大切に育てていきたいと思うのです。エレミヤは常に「Remnant」をこの地に残していくことを考えていました。各時代に訪れる危機を乗り越え、次の時代を担っていく信仰の担い手のことです。私自身も、Remnantを残していくことを思い描きながら、与えられた牧会の働きに従事させていただいております。現在私は44歳であります。常に次世代のことを考えつつ、今がどういう時代であるかを見極め、敬愛する教会の皆様にお伝えしていこうと努めております。

#### 【祈り】

如何なる時代にあっても、福音のことばとまことの信仰とを世に残してきてくださった天の父なる神様。過去にはパラダイム転換となるような出来事が、数多くこの世界に起きてまいりました。戦争、災害、飢饉、経済破綻……と、数えきれない危機が人間の生きる社会を破壊してきました。しかし、どのような時代にもイエス・キリストの福音は生き続け、「Remnant」たちによって継承されてきました。今、もしかすると時代の転換点にあるかもしれませんが、私たちに託された使命と役割とを認識し、純粋な福音のメッセージを残していくことができるよう、お助けください。

#### 【祝祷】

仰ぎ願わくは、  
あらゆる時代にあっても「Remnant」を残し、福音のことばを世に告げ知らせ給う、父なる神の愛、  
贖い主として再び世に來り、神の国を完成へと導き給う、主イエス・キリストの恵み、  
各々が果たすべき務めに目を開かせ、第一歩を踏み出させ給う、聖霊の親しき交わりが、  
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。